

Title	血液稀釈実験による肺血管周囲腔拡大と肺水腫の関連に関する研究
Author(s)	谷, 靖彦
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36853
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	たに 谷	やす 靖	ひこ 彦
学位の種類	医	学	博 士
学位記番号	第	8819	号
学位授与の日付	平成元年8月12日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文題目	血液希釈実験による肺血管周囲腔拡大と肺水腫の関連に関する研究		
論文審査委員	(主査)		
	教授	川島	康生
	(副査)		
	教授	杉本	侃 教授 吉矢 生人

論 文 内 容 の 要 旨

(目 的)

肺血管周囲腔の拡大 (perivascular cuffing, 以下PVC) は間質性肺水腫の形態学的特徴の一つとして記載されてきた。しかし, PVCと肺水腫の関連についての定量的評価については知見に乏しい。著者は犬を用いて急性血液希釈実験を行い, 膠質浸透圧の変化によるPVCの発生と肺水腫の関係を検討した。

(方 法)

1) 雑種成犬33頭 (体重8~15kg) を用い全身麻酔, 人工呼吸下に一側開胸し, 血液希釈を行った。すなわち, 大腿動脈から10ml/kgを脱血し, 大腿静脈から脱血量の約2.5倍の乳酸リンゲル液注入の操作を繰り返しヘマトクリット (Ht) 値を10%とした。この操作中中心静脈圧をモニターし, 希釈前より3~5 cmH₂O高値に保った。

2) 実験犬は以下の4群に分けた。

実験Ⅰ (5頭): 開胸直後肺組織片を採取し残存肺断端は空気漏れがないよう可及的に縫合した。

その後血液希釈を行わず, 1時間後, 2時間後にも肺組織片を採取した。

実験Ⅱ (12頭): 血液希釈後1時間循環動態を安定維持させた後, 両側肺を摘出した。

実験Ⅲ (6頭): 開胸後血液希釈を行いつつ, 経時的に肺組織片を採取した。

実験Ⅳ (10頭): 開胸後血液希釈を行い, 循環動態を1時間安定維持させた後, 10%低分子デキストラン加乳酸リンゲル液を循環動態の安定を観察しつつ1時間持続輸液 (約75ml/kg) した。実験Ⅳでは, 開胸直後, 血液希釈終了時1時間後および代用血漿輸液後の3時点において, 血漿膠質浸透圧を

electronic membrane osmometer (Knauer 社) で測定した。また採取肺組織片の一部を用いて肺血管外水分量を測定した。すなわち切除肺の断面を下にして、自然な状態でドレナージさせた肺重量の20%は残存血液であるという Cooper らの実験結果にしたがって、肺重量 1 g あたりの水分重量 = $X = (\text{肺重量} - \text{肺乾燥重量}) / \text{肺重量}$ 、血液重量 1 g あたりの水分重量 = $Y = (\text{血液重量} - \text{血液乾燥重量}) / \text{血液重量}$ 、を計算し、肺血管外水分量 = $(X - 0.2Y) / (0.8 - (X - 0.2Y))$ (単位は water g / g of bloodless dry lung) とした。

3) 切除肺組織片はホルマリン液固定後、アルコール脱水し、パラフィン包埋後 HE 染色した後、光学顕微鏡下に PVC を観察した。PVC が血管全周にわたって認められるものを陽性とし、検索血管数に対する PVC 発生血管数の比率を PVC 陽性率とした。

(結 果)

実験 I : PVC 陽性率は傍気管支血管において開胸直後 $8.0 \pm 7.6\%$ 、開胸 1 時間後 $11.6 \pm 12.7\%$ 、開胸 2 時間後 $8.8 \pm 8.1\%$ (S. D.) で有意差はなかった。肺野血管でも開胸直後 $1.4 \pm 2.8\%$ 、開胸 1 時間後 $3.0 \pm 2.7\%$ 、開胸 2 時間後 $1.2 \pm 1.6\%$ で有意差はなかった。

実験 II : PVC 陽性率は傍気管支血管 369 本中 280 本 (75.9%)、肺野血管 1254 本中 126 本 (10.0%) であり、両者間に有意差を認めた ($P < 0.005$)。また傍気管支血管で径 150μ 以下のもので 70.1% (197/281)、径 150μ 以上のものでは 94.3% (83/88) の陽性率であった。肺野血管でも径 150μ 以下のもので 15.2% (179/1175)、 150μ 以上のもので 57.7% (45/78) の陽性率で、共に両者間に有意差 ($P < 0.01$, $P < 0.005$) を認めた。左右肺、前部、背部別に PVC 陽性率を検討すると、傍気管支血管では 61~64%、肺野血管では 6%~9% で、各群内に有意差を認めなかった。

実験 III : 傍気管支血管において、血液希釈前の PVC 陽性率は $8.8 \pm 13.0\%$ 、血液希釈終了時は $61.5 \pm 15.4\%$ と有意 ($P < 0.005$) に増加した。肺野血管でも、血液希釈前 $5.2 \pm 3.5\%$ 、血液希釈終了時 $24.0 \pm 19.2\%$ と有意 ($P < 0.05$) に増加した。また PVC 陽性率と Ht 値の間には有意の負の相関を認めた (傍気管支血管で $\gamma = -0.47$, $P < 0.01$ 、肺野血管で $\gamma = -0.33$, $P < 0.05$)。

以上の結果で、傍気管支血管と肺野血管の PVC 陽性率の変化は同じ傾向を示すことが判明したので、実験 IV においては傍気管支血管についてのみ検討した。

実験 IV : 血液希釈前と希釈終了 1 時間後の血漿膠質浸透圧は $296.0 \pm 58.3 \text{ mmH}_2\text{O}$ から $39.5 \pm 8.6 \text{ mmH}_2\text{O}$ と有意 ($P < 0.05$) に低下し、肺血管外水分量は $3.66 \pm 0.80 \text{ g / g of bloodless dry lung}$ から $8.00 \pm 2.26 \text{ g / g of bloodless dry lung}$ と有意 ($P < 0.05$) に増加した。PVC 陽性率もまた $11.0 \pm 10.0\%$ から $60.0 \pm 23.1\%$ と有意 ($P < 0.05$) に増加した。その後代用血漿剤の注入によって血漿膠質浸透圧は $191.0 \pm 63.0 \text{ mm H}_2\text{O}$ と有意 ($P < 0.05$) に上昇し、肺血管外水分量も $6.41 \pm 2.11 \text{ g / g of bloodless dry lung}$ と有意 ($P < 0.05$) に低下した。PVC 陽性率は $48.8 \pm 36.9\%$ と低下したものの、有意な変化ではなかった。実験 IV において代用血漿輸液群を除く肺組織標本 20 個の PVC 陽性率と肺血管外水分量を検討すると、両者間に有意の正の相関を認めた ($\gamma = 0.71$, $P < 0.001$)。

(総 括)

1) PVC 陽性率は開胸時傍気管支血管で $8.8 \pm 13.5\%$ (S. D.)、肺野血管で $5.2 \pm 3.5\%$ であり、血

液希釈により、ヘマトクリット値を10%に低下させると、傍気管支血管では $61.5 \pm 15.4\%$ 、肺野血管では $24.0 \pm 19.2\%$ と有意に増加した（傍気管支血管 $P < 0.005$ 、肺野血管 $P < 0.05$ ）。

2) 血液希釈過程のPVC陽性率は肺血管外水分量と正の相関を示した（傍気管支血管 $r = 0.71$ 、 $P < 0.001$ ）。以上よりPVC陽性率は肺間質水腫の程度をよく反映したものであることが明らかとなった。

論文の審査結果の要旨

本研究は肺血管周囲腔の拡大（perivascular cuffing, 以下PVC）について、犬で急性血液希釈実験を行い、肺水腫との関係を定量的に検討した結果、PVC陽性率は肺血管外水分量と正の相関を示し肺間質水腫の程度をよく反映したものであることを明らかにしたものである。肺水腫や肺間質に関連した病態の理解の一助となるもので学位に値すると考える。